

大学婦人協会東京支部

1993.7
第14号

●記念講演「数学と文学のはざまで」

●支部決算報告及び予算

92年度東京支部総会は四月二十四日、国立教育会館で開催された。出席者七十三名、委任状提出者二百七十八名で会は成立。峯川支部長の挨拶、92年度事業報告、決算報告に続いて審議事項に入った。

93年度事業計画、予算案に続き、支部規約の一部改正が提案された。支部長より改正案について、現状に合わなくなった箇所、わかりやすい表現に改めた箇所等説明があり審議の結果満場一致で承認された。(従って、支部総会のご案内と一緒に送った支部規約改正案がそのまま新しい支部規約となりますので改正案という言葉は消していただき支部規約として保存してください。)

JAUW青木会長の挨拶の後、95 I F U W 日本大会準備委員会、募金委員長加藤恭子さんが、昨今の厳しい経済事情の中、会員の多大な募金の協力をお願いしたいと話された。

議事終了後、お菓子とお茶が配られ、休憩の後、お茶の水女子大学教授 藤原正彦氏の講演「数学と文学のはざまで」を拝聴した。

(吉田桂子)

東京支部総会報告

熊本通常総会

三月三十一日総会前日、午後より熊本ニュースカイホテルに於いて支部長会・評議委員会が開催され、夕刻六時から懇親会が開かれた。

会は大イッ、オーストラリアからのゲストを迎え、地方色豊かな踊りや歌を聴きながら他支部の方々との親睦を図る楽しいひとときであった。

翌四月一日総会当日。出席者一六三名、出席支部・二十二支部、欠席支部・十支部。

開会の辞の後、物故会員の冥福を祈って全員黙禱。次に各委員会・支部等の報告、審議、懇談へと続いた。

審議事項では国内、国外奨学委員会規定の改革案が提出、可決された。

懇談事項では、秋のセミナーについてと、一九九五年に開催される I F U W 日本大会についての説明があった。その中で日本大会募金委員長からの現状説明の後、会員からの寄付の集め方等討議があった。それは会員各位から募ってはどうか、という募金委員長案に対して、支部単位で集めてほしい、という会員からの意見が出されたもので、多数決の結果、前者に決定。この件では時間をかけた活発な検討が行われた。

総会も無事終了、次期開催地も静岡に決まって、熊本支部から静岡支部へとバトンタッチされて閉会となった。

(磯村明子)

行事予定

4月24日 東京支部総会、於国立教育会館

5月8日 皇居見学

5月18日 ニュージーランド大使館訪問(財務)

5月25日 第三回漫歩くらぶ

6月12日 三越歌舞伎(財務)

6月16日 講演会「ファッションとしての建築」岡本宏氏「高齢社会が必要とする建築」小松正樹氏

7月1日 「ともしび」14号発行

7月22日 老人医療施設浴風会見学

9月25日 JAUWセミナー

～ テーマ「改めて高齢者問題を考える」幕張メッセ

10月26日 浮世絵講座



支那総会記念講演
「数学と文学のはざままで」

講師 藤原正彦氏

(お茶の水女子大文理学部教授)

若い頃に読み、強い衝撃を受けた「流れる星は生きている」の、あの坊やがどんなになられたのだろうか。でも、「数学と文学のはざままで」ちょっと難しく、眠くならないように気を付けなくてはと、姿勢を正して待つ。始まって5分もすると、身を乗り出して「ふん、ふん」うなづいている我を発見。

数学者であり、エッセイストでもある先生が、数学と文学の共通点や相違点、そして、その両方で活躍の楽しさやご苦労を数学者らしく論理明快に分析してみせてくださる。

「数学も文学も究極は美です」我々の想像もつかない数学の世界があることを初めて知る。夜の思考は情緒的であって論理には適さないこと、文学は有限(死)が前提で成り立ち、数学は永遠をめざしていることなど、文学の井の中しか知らない私は、あらためて文学について教えられることが多かった。

私達はなぜか早い時期に、自分を文系とか理系とかと決めつけてしま

い、その中に閉じ込められただけで、先生のように「二足わらじ」で思考なさると、こんなにも両方が鮮やかに見えてくるのかと驚かされる。日本では、武士道のなごりで一つのことに打ち込むことが美德とされるが、欧米では、一人の人が多方面で活躍することも多く、また、これからはますますそれが必要になってくること。

学問でも、色々な分野に亘る発想が必要であり、そしてまた、学問に大事なものは、学力よりむしろ一つのことには拘る性格や体力であることなど、日本の教育のあり方についても考えさせられることが多かった。

やはり気象庁に勤務されながら、作家でいらつしやうたお父様の新田次郎氏のこと、子育ての為に筆を折られたお母様の藤原てい氏のことで、そして、ご家族との心温まるエピソードなど、興味深いお話を伺い、ちよつと知的興奮に酔い、先生のご著書を胸に家路についた。

(坂上栄美子)

著書紹介

「若き数学者のアメリカ」

「数学者の言葉では」

「数学者の休憩時間」

「遙かなるケンブリッジ」

皇居見学

藤枝 史子

五月八日午後、宮内庁書陵部首席研究官の川田貞夫先生を講師にお迎えして、新緑の大変美しい皇居東御苑の見学会が行われた。

東御苑は皇居の東側の、旧江戸城の本丸と二の丸を中心とした地域で、苑内には徳川三百年の歴史を秘めた多くの建造物や庭園が残っている。

江戸城の正門であつた大手門前に集合した参加者四十八名は、川田先生のユーモア溢れる説明に聞き入りながら、大手門を渡り、大手門・三の門・中の門・中雀門と進んで江戸城の中心本丸跡に入っていく。途中、江戸城がいかに防御に重きをおいて造られていたかの説明を受ける。門は櫓形門形式とよばれる敵の侵入を防ぎやすい構造になっており、各門には同心番所、百人組番所、大番所などがおかれて門の警備にあたつたという。また、自然の地形を巧みに利用して造られた濠と、高く積み上げられた見事な石垣、白壁と瓦屋根の美しい櫓は、敵の侵入を阻んだことが一目で解る。

本丸御殿は表向・中奥・大奥の三つに分かれていて、全部で一三四〇〇坪もあり、一六〇六年に建築され

て以後五回焼け、一八六三年の火災を最後に再建されなかった。今は焼け跡の残る石垣と、広々とした芝生と、鬱蒼と繁る木立に当時の栄華を偲ぶことが出来る。続いて天守閣跡に登る。江戸の最高地に建てられた天守閣は、五層五階で日本一の威容を誇つたが、完成後僅か二十年で振袖火事で焼失し以後再建されなかった。

ここで全員で記念写真におさまり、楽部・桃花楽堂・書陵部を経て二の丸庭園へ下る。二の丸御殿も四回焼失して今はなく、江戸の町は何と大火が多かったのかと思う。

最後は急ぎ足で松原門・平川門をくぐり、現在唯一の木製橋の平川橋で解散した。



好天と新緑に恵まれて、大変楽しく有意義な見学会だった。

他支部活動紹介

函館支部便り

吉村公子

戦後の混乱期いち早く帰国した米宣教師の提唱により発会した支部でした。自明の理ながら年数と共に会員の高齢化が進んで参りました。

一九八〇年頃、急速に体調を崩し始めた会員、老気味の会員が増し、例会の出来ない時期、本部の計画に従って行けない時がありました。

丁度その折、札幌でのJAUWに出席された山崎倫子会長に相談致しました所、「二、三年休会しては」との助言を頂きました。そのまま今日まで休会の状態を続けた次第です。

その間には広く門戸が開かれ、大卒であれば制約なく入会出来る制度になったのに無関心に過ごし、若き後継者を育てなかった無責任を痛感しております。ゆずり葉の季を失った無智とも言えるべきでしょう。

勿論、脱会を避けた本部の意向をも考え、可能な方にもお願いしてきましたが、先輩の私共の歩み方が道にならなかった為か、敬遠されてる次第です。その間、他界された方六名、転出一名、会員六名中二名は在宅ケアの方です。とにかく再開出来るよう努力は惜しまないつもりです。

最高裁判所を見学して

秋田圭子

春風胎動の好日和に恵まれた三月二五日最高裁の門をくぐる。平素荘厳且つ近寄り難い存在の庁舎も、内に入るやその美しさに魅了された。

ご案内は、設計者岡田新一先生ご自身という光栄。先生は一九六九年最高裁判所舎競技設計に応募二七点中最優秀賞を受賞され、国内はもとより海外でも活躍されている。

裁判所としての「品位と重厚」を茨城県稲田花崗岩をメインに、木と織布を素材とし「厳しさと安らぎ」を合わせ持つ表現によって内・外の空間の形態を重視されたデザインと伺い、先生のご企図とご情熱が見学者の心に伝わり感動を覚える。

レセプションルームの天井は織物、シャンデリアは、個を尊び全体の調和を図るユニット形式。前庭は皇居を借景し、奥行きと広がりを出す。

ドアや通路のガラスに衝突防止の彫金。把手の彫金も芸術品。坪庭の野口イサム氏デザインの涌泉六基も個を中心にリビートする面白さ。

各部共天井部からの自然光採取を基に窓を極端にセーブ。床の大理石は磨きの漸層法、独特の風合い。ヨーロッパ広場の感覚、大法廷前

ホール。既成の天井を否定した逆ドーム。雲間の太陽と広場に集う人々を心象。アルミ材コーティングの木の幹は、中世の裁判を思わせる森のイメージ。国会議事堂と同軸上の十字文様下には、一九七四年完成当時のタイムカプセルが埋められている。

いよいよ大法廷。二重のガラス天井から太陽の光が入る世界無比の構造は天道に恥じない公正さを表す。デザインと技術の平衡―側面の石とタビストリーは反響と吸音の役目―肉声でも充分の音響効果。宇宙から見た太陽と月、昼と夜を半抽象するタビストリー。相反するものの調和。

徹底して正と悪、強と弱の調和をモチーフとしている。桜材の重厚な十五人の裁判官の椅子は、まさに正義のシンボルそのもの。

小法廷の丸天井、側面のイタリー大理石、墨絵のタビストリーは気品



と落ち着いた雰囲気を感じ出す。

完工後二十年の歳月が感じられない新鮮さに、この建物の永遠性を願う「創造」に懸けた建築家の芸術魂に深い感銘を受けた見学であった。

先生、企画の諸姉に感謝しつつ。

●設計者岡田新一氏のお便りから
「作品は作者(私)の分身で、それなりに好んでいただき理解していただけると嬉しいものです。それには思い入れもあり、思想や哲学もありますので、建築は生きたものなのです。(中略)」

一度訪問された方が語りつき後世に最高裁という建築の持つ意味を伝えて下さったならば望外の幸いです。

●寄贈図書紹介

・「地球環境クイズ」

―四〇八のQ&A―

B・アドラー著

戸田清・平野和子訳

おねがい

財務院では来る九月に行われるセミナーの会場で、例年通りバザーを行います。皆様からのご提供品をお待ちしております。ご寄付いただける品を本部宛、お送り下さいますようお願いいたします。(熊切富子)

藍より蒼く

熊本の漱石と天草

四月二日午前八時、バスは「熊本の漱石を尋ねて」に出発する。前日迄の総会の緊張から解放されたからか、皆明るい。解説は、熊本大学法学部(刑法)田中久智教授。漱石が熊本に沢山の足跡を残していたとは少しも知らなかった私は、興味津々。

漱石は七回も引越している。先ずそれらの旧居地を巡る。始め少しお固いかと思われた先生の御熱心な説明が実に面白い。「……となつていますが、実は私は……と思います」と言われる度に皆の顔がほころんだ。時々話される漱石の私生活のエピソードが特に興味深い。

その後、泰勝寺、漱石記念館を経て「草枕」で有名な峠の茶屋、野出の茶屋に向かう。この二つの茶屋のどちらが正しいかは、わからないが「おい」と声をかけたのは、どうやら野出の茶屋の様である。しかし今は、石碑しかなかった。それも少し位置がずれているとのことだ。ゆかりの那古井館での昼食の後、バスはニュースカイホテルに降り、名解説者、田中教授にお別れする。

午後二時、バスは、天草へと向かう。さすが森の都、水の都と呼ばれ

るだけあって美しい緑の中に桜が日毎に咲きはこつていく。少しなじみになった町並みを懐かしんでいるうちにいつの間にか天草五橋の第一号橋、天門橋を渡り大矢野島を南下すると丘の上に天草四郎像があった。そばに立つと透き通る程美しい海の遥か向こうに島原半島がのぞまれる。一揆を起こした時未だ十六歳だったとの事、思わず息子達と比べてしまふ。五橋は松島で終わる。「天草松島」と呼ばれる多島海の眺望はあきない。だが「一年中しめ縄を飾っている家はキリスト教ではないという印です。」というガイドさんの説明に改めて往時を偲ぶ。

夕方海辺のホテルに着く。夕食前の一時、皆で丘の上に登る。紺碧の海の美しさに思わず息を呑む。

新鮮な海の幸豊かな夕食を心いくまで楽しんだ後、出井熊本支部長に紹介された岡山の近藤さんから、昨年のIFUWの総会で、出井さんと御一緒にボストンからメイン州迄のAAUWのツアーに参加された経験をお聞きし、とても有意義だった。

翌朝、熊本支部の行き届いた御配慮に感謝しつつ天草を後にした。熊本の皆様、有り難うございました。

(有本玲子)

漫歩くらぶ

根津弥生町界隈めぐり

第三回漫歩くらぶ根津弥生町界隈めぐりは、五月二五日、さわやかな好天に恵まれ、総勢二六名、お世話役の菊地さんの先導で終始なごやかに楽しく歩きまわった。

定刻の十一時には、千駄木駅に全員集合。学生時代の面影を僅かに残すいでたちで、皆リラックスした雰囲気である。三々五々、団子坂をのぼり、先ず森鷗外記念館(観潮楼跡)を訪ねる。今や、東京湾の観潮どころか、二十メートル先のビルに前面を遮られて、遠方の視界ゼロ。専ら室内に展示されている遺品を見て廻る。次は、やぶした通りを歩いて根津神社へ。つつじの花が終わって、丁寧に刈り込まれた植栽に気持ちよくなつて記念撮影。スナップ写真

を撮りながらおしゃべりすること約一時間。権現様に敬意を表しながら次はサトウハチロー記念館へ。色とりどりに飾られた鉢植の花の洪水に感嘆する。弥生坂を経て、弥生美術館、竹久夢二美術館に辿りつく。しかし、時間も過ぎ、名画鑑賞より団子を。ということになり、港屋でハッピー、オムライスなど、女学生好みのメニューで遅い昼食をとる。ようやく落ち着いて両美術館に入り美人画を眺めながら、それぞれ過ぎし日の思いに浸る。せっかく食欲が満たされたのに、大正ロマンに若き頃の自分を併せみて、多少寂然としない人もいたのか、三時をまわって自然解散となり、不忍池から上野に出る組と、千代田線を利用する組とに分かれて散会した。



最後の手紙 (竹久夢二)

ニュージーランド大使館見学

中野照子

五月十八日、朝のうちは小雨がぱらついていましたが、大使館に着く頃は雨も止み私達はなんとなく弾む心でニュージーランド大使館の玄関に入りました。すぐ前にお庭があり、雨後の青葉が一段と美しく風に揺れているのが目に入りました。

やがて大使夫人 Mrs. McDowell と女性大臣 Minister Katharine O'Regan がおいでになり、美しくエレガントな大使夫人からご挨拶ならびに今日講演して下さる大臣のご紹介がありました。大臣は消費省大臣の他、婦人問題省、保健福祉省の政務次官など兼任され、非常に有能な方であると同時にごく自然に現在の職務を全うされている方という印象を受けました。驚いた事には、二人のお子様があり、政治家、妻として母の三役を果たされています。F・ナイチンゲールに傾倒して、結婚前には看護婦もされていたそうです。

ニュージーランドは今年で婦人参政権施行百年目とのこと。男性中心の社会だった百年前のニュージーランドで、長い試練を経て、しかも平和的に婦人参政権を獲得したのが、

日本より五十年前以上前の一八九三年でした。大臣は二十九番目の女性議員です。現在議員全体の16%が女性議員であること、その人達は皆「ノー」とはつきり言える女性たちであることなど、興味深く聞きました。

大臣は一九七五年、政治との関わりを持ち始め、自分が八年間補佐した議員がやめたあととは、自らが議員になる事を心に決めて実行に移されました。私達は、常に受け身で待たずに、自分から求めていかなければならないと強調しておられました。

青木会長も過密スケジュールのなか駆けつけてご挨拶。先住民民族マウリ人をめぐる質問など相次ぎましたが、最後はお茶を頂きながら、お庭を眺めたり、多くの方々との語らいを楽しみました。風薫る五月、通常は入ることのできない大使館で、すぐれた女性達の話をお聞きすることができ、大変有意義な一日でした。今回の催しのためにいろいろお骨折りくださいました高林さんはじめ財務の皆様に深く感謝申し上げます。

婦人参政権運動のシンボル（二八九三）

図書紹介

《百年読みつがれた名作》

「ドットちゃんとかんガル」

エセル・ベドレー著・時枝 旭訳

日が暮れて行く森の中で、ちっちゃな女の子、「ドット」が道に迷い、恐れおののいている。そこへ一匹のカンガルが現れるところから物語は始まる。そのカンガルが探ってくれた木いちごを食べた「ドット」は、不思議や不思議、森の中の生き物たちと自由に話ができるようになる。そしてカンガルのお腹の袋に入れてもらって五日間も森の中をさまよう間に、彼女は次々と今まで見たこともない珍しい鳥や動物と出会い、楽しい会話を交わしたり、深い森の中で怖い思いや危険な目にもあう。しかし、親身になって助けてくれたカンガルのおかげで我が家に無事に帰り着く。（3/15日 日経紙より抜粋、筆者は時枝旭氏訳者）

オーストラリアで一八九九年の初版以来、百年のロングセラーを続けるエセル・ベドレー女史の名作、「ドットちゃんとかんガル」に、訳者は二三年前のオーストラリアへの出張の時ふと立ち寄った書店で出会う。そして幼い長男に読み聞かせている中に、ドットと動物たちのかわ

いらしい交流は勿論のこと、笑いカワセミ、白オオム、カモノハシ、コアラなど次々と登場する鳥や動物達に魅せられこの本を訳したい、日本の子供達に読ませたいという思いに駆り立てられる。後にオーストラリアに駐在、実際にこれらの動物達との触れ合いがあったこと、又作者の、当時既に開拓で失われていく自然や動物に寄せる深い愛情への共感等が、この本の翻訳に一段と拍車をかける結果となったようである。

◎今回、訳者のご好意により、売り上げの一部をJAUWに寄付して頂くことになりました。残りは総て、オーストラリアの野生動物保護団体に寄付されます。オーストラリアに在住または旅行された方は勿論、これから行かれる方も、この本の中に出てくる動物達がきつと大好きになれることでしょう。



1992年度大学婦人協会東京支部決算報告

1993年度予算

1992年4月1日～1993年3月31日
(単位:円)1993年4月1日～1994年3月31日
(単位:円)

収入の部

科 目	予算額	決算額	差 額	備 考	予算額	備 考
I 会 費 収 入	1,060,000	1,213,500	+153,500	2000×603口、賛助会員2500×3	1,100,000	2,000×550口
II 基本財産利息収入	100,000	136,047	+36,047		100,000	
III 運用財産利息収入	5,000	4,233	-767		5,000	
IV 寄 付 収 入	200,000	1,022,144	+822,144	寄付、講演会費、他	300,000	
V 雑 収 入	20,000	32,100	+12,100	入会還付金400×30口 他	20,000	入会還付金他
当期収入合計	1,385,000	2,408,024	+1,023,024		1,525,000	
前期繰越金	356,043	356,043	0		1,064,925	
収 入 合 計	1,741,043	2,764,067	+1,023,024		2,589,925	

支出の部

科 目	予算額	決算額	差 額	備 考	予算額	備 考
I 管 理 費	1,000,000	916,544	-83,456		1,090,000	
(1) 備 品 費	10,000	0	-10,000		80,000	
(2) 消 耗 品 費	45,000	107,752	+62,752	文具、封筒、コピー 他	100,000	文具、コピー、振込用紙
(3) 印刷製本費	75,000	26,422	-48,578	支部お知らせ 他	35,000	支部お知らせ
(4) 通 信 費	330,000	231,570	-98,430	支部お知らせ、本部会報	300,000	支部お知らせ、本部会報
(5) 交 通 費	60,000	72,000	+12,000		75,000	
(6) 事 務 所 費	100,000	100,000	0	本部への分担金	100,000	本部への分担金
(7) 事 務 手 当	380,000	378,800	-1,200	事務員給料一部負担 他	400,000	事務員給料一部負担
II 運 営 費	85,000	84,822	-178		105,000	
(1) 総 会 費	50,000	50,530	+530	会場費、マイク等、菓子代	55,000	会場費、マイク等、菓子代
(2) 委 員 会 費	35,000	34,292	-708		50,000	
III 事 業 費	400,000	513,168	+113,168	ともしび12号、講演会他	650,000	ともしび、講演会、他
IV 予 備 費	20,000	0	-20,000		20,000	
V 基 本 金 積 立	20,000	184,608	+164,608	貸付信託	200,000	貸付信託
当期支出合計	1,525,000	1,699,142	+174,142		2,065,000	
次期繰越金	216,043	1,064,925	+848,882		524,925	
支 出 合 計	1,741,043	2,764,067	+1,023,024		2,589,925	

1993年3月31日現在

基本金財政状況: 基本金 2,514,608 貸付信託 2,514,608……三井信託銀行 新宿西口支店

運用財政状況: 繰越金 1,064,925 普通預金 1,032,026……三井信託銀行 新宿西口支店

現 金 32,899

会 計 駒木 三枝子 高井 敬子

厳正に監査いたしました結果、正確に記載されており、間違いのないことを証明いたします。

1993年4月12日

会計監査 藤井 賤恵 金子 京子

編集後記



●四月の支部総会を始めとする本部支部主催の行事の数々、春の陽気にも誘われ新米編集委員としては、原稿依頼をスムーズにすべく出来る限り参加してみたのですがなかなか充実した内容でした。

尚九月のセミナーのテーマ「高齢社会」については沢山の御意見が寄せられることと思います。次号は原稿の山に囲まれるのではないかと大いに期待しております。

●不慣れた編集の仕事も、ベテランの皆様が教えていただきながら一年が過ぎました。木々のみどりも、若葉から深緑へと移り変って、いよいよ夏も間近と言う時、「ともしび」14号をおとどけする事が出来、気分も晴れやかです。

●今回のご成婚報道の中で、三十四年前の両陛下ご成婚時の映像も放映されていた。お馬車のパレードが行く麹町辺りも四谷の町もまだまだ家並が低く、電柱だけが目立っている。

改めてこの三十四年間の日本の繁栄と変貌を見る思いであった。次の三十年間に、私たちは何を、何を残して行けるだろうか。

(H)